



入学試験問題

総合科目Ⅲ

(配点一〇〇点)

平成二十七年三月十三日

九時三〇分～一一時三〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手をあげて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 四、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
- 五、二枚の解答用紙が渡されるが、解答は、問題ごとに所定の解答用紙に記入しなさい。青色刷りの解答用紙が第一問用、茶色刷りの解答用紙が第二問用です。所定の解答用紙に記入されていない解答は無効です。
- 六、各解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所、裏面一箇所）、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 七、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 九、この問題冊子の余白は、草稿用にしてもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 一〇、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 一一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

草
稿
用
紙

(切り離さないで用いよ。)

草
稿
用
紙

(切り離さないで用いよ。)

第一問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「正義」という言葉は当然のことながら、あまり評判が好く^よない。「君は正義感が強い」と言われて、それを素直に賛辞と受け取れるほど淳朴^{じゆんぽく}な人物は、現在では貴重な存在である。正義漢とは人を裁くことにサディスティックな悦び^{よろこ}を見出す狂信家のこと——これが相場的イメージであろう。筒井康隆のシオート・シオートに、この世であらゆる人間を告訴した正義の味方が、死後無事に天国へ行けたものの、そこには善人しかおらず、誰も弾劾できなかつたので、彼は地獄の苦しみを受ける破目になったという話がある（『正義』、『笑うな』所収）。

しかし、一見逆説的とも思えるのだが、「正義」のこの不評にも拘^かわらず、「不正」という言葉は割合に人に好まれ、しかもある昂揚^{こうよう}した感情を伴って使われるのが常である。「不正な政治献金」、「不正な指揮権発動」、「不正な大衆課税」、「不正に目をつぶるな」、「不正入学」、「不正な管理価格」、「権力の不正を暴く」、「蔭^{かげ}で不正を働く」等々、例を挙げればきりがなし。社会正義の番人を自任するマスコミがこのような表現を愛用するのは驚くに当たらないが、「しらけた」大衆も「正義」がもつ大仰で面映^{おも}ゆく冷笑を誘うような響きを、不思議と「不正」に対しては感じないようである。それどころか、自分が明らかに不当な取扱いを受けたと感じるとき、人々は「不正」を真剣な非難の言葉として、何のためらいもなく使うであろう。また、大抵の人間は、人が理由なく殺されたり、虐待されたり、差別されたりするのを見たとき、たとえその人が見^みず知らずの他人であつても、ある義憤を感じるものである。このような場面で使われる最も自然な表現は「不正」である。

「正義」と「不正」とに対する人々の態度のこのような非対称性は多くの哲学者が既に注目している。彼らは、そこから、正義の問題は「正しさとは何か」よりも「不正とは何か」を考察することによって説明できるという着想を引き出した。しかし、一体なぜ、このような非対称的な態度を人は取るのか。

ここで直ちに思いつく一つの答えは次のようなものである。不正な行為とは義務に反した行為である。それ故その行為と行為者は非難の対象となり、人々の関心を惹^ひかずにはいない。これに対し、正しい行為とは義務を果たす行為であつて、行為者はそ

れによって、当たり前のことをしたにすぎず、取り立てて称賛するまでもない。称賛に値するのは、自分の命を投げ棄てて他人の命を救うというような、義務以上のことをなす行為——カトリック神学において「余分の勤め(works of supererogation)」と呼ばれるもの——だけである。従って、人間生活にとつて意味のあるのは、正義の要求を満たさない行為か、その要求以上のことをする行為かであつて、正義の要求を満たすだけの行為は退屈であり、固有の魅力をもたない。正義自体よりも「不正義」と「超正義」こそが人間の関心事なのである。

この答えは一つの興味ある論点を衝いてゐるが、ここでの問題に対する充分な解答にはなっていない。第一に、煩悩多き人間族にとつて、正しい行為は常に容易なわけではない。普通の人間なら屈してしまうような強い誘惑が存在する状況において、それに抗して正義の要求(と自ら確信するもの)に従う人は、義務以上のことをする人よりも、称賛に値する場合がある。飢えた子供を抱える貧しい労働者が、誰にも見られる虞のないときに、パン屋からパンを盗もうとしてそれを思い止まつたとしよう。彼のこの行為を、税金対策に悩む金持ちの寄付活動よりも称賛したいという人は少なくないだろう。(私的所有を神格化するブルジョア倫理に毒された哀れな奴として、この労働者を嘲笑する者でさえ、ブルジョア倫理の中では労働者の行為の方が金持ちの行為よりも価値をもつことを認めるかもしれない。)正義が仮に当たり前のことであるとしても、それは眠くなつたら寝るのが当たり前であるのと同じような意味で当たり前なのではない。正義の女神にとつて当たり前なことは、神ならざる者どもにとつては、時として「つらい」のである。この「つらさ」に対する人間的共感を欠くところに正義漢が嫌われる一因がある。「正義」という言葉の不評に一役買つてゐるのは、それにつきまとう正義漢のこの冷たいイメージである。先の答えはこの点を見落としてゐる。

第二に、より重要な点であるが、正義と不正とに関する人々の態度の非対称性は、単に行為や制度のあり方に対する関心と反応という実践的態度における非対称性だけでなく、認識論的態度における非対称性をも含んでゐるのである。即ち、何が正義かを問い、また答えようとする者に対して、シニカルで懐疑的な笑みを浮かべる人が、しばしば特定の行為や処置に関して「それは不正だ」という判断を確信をもつて下すのである。上述の答えはこのような非対称性を説明できない。むしろ、それは「何が正

義か」についても「何が不正か」についてと同じ程度の確信を人々がもつことを前提している。

従って、正義と不正に対する人々の態度の非対称性の説明は、他所に求められなければならない。

正義に関する人々の両面的な態度を説明するための一つの鍵は、「正義とは何か」という問いと「何が正義か」という問いとの区別に求められるだろう。前者は正義の問題全体を包括するものとして問われることもあるが、特にこれを後者と区別された問いとして解するならば、この問いは正義の基準(criterion)、即ち正義原則(the principle of justice)を求めているのではなく、正義の意味(meaning)、即ち正義概念(the concept of justice)あるいは正義理念(the idea of justice)を求めているものと考えることが出来る。これに対し、後者はまさに正義の基準としての正義原則が何であるかを問う。相対立する様々な正義観(conceptions of justice)は後者の問いに関わり、様々な正義原則を解答として提示している。しかし、これら様々な正義観の提唱者はいずれも自己の主張を、人生観や法律観や国家観、さらには道徳観一般等と関連しつつもそれらと同一ではない正義観として提出している以上、彼らがそれぞれの正義原則によつてその基準を与えようと意図している共通の正義概念が存在するはずである。もし彼らが同一の概念について異なった基準を与えているのでなければ、そもそも彼らの間に対立は存在し得ない。これは肝硬変の一つの判定方法を提唱する医学者と、肝臓癌^{がん}の一つの判定方法を提唱する医学者との間に、対立が存在し得ないのと同様である。

正義観あるいは正義原則と、正義概念との区別を念頭に置かなければ、非対称性の問題に以下のように答えることができるだろう。

正義観の次元では、平等主義対自由主義、絶対的平等対相対的平等、全体主義対個人主義、功利主義対個人権理論、福祉対自由、能力主義対経歴主義、業績主義対努力主義、「必要に応じて」対「労働に応じて」、応報刑対改善刑等々、様々な立場の厳しい対立がある。これらの対立は根深く、妥当な正義原則について一般的合意は存在しないし、これからも成立する確実な見込みはない。どの正義観もそれを支持する一応の理由はもっているが、万人を納得させる決定的根拠をもたない。このような諸正義観

の止むことなき角^や・対立は、絶対的な妥当性をもつ万能公式としての正義原則の存在について人々を懐疑的にする。一つの正義原則を絶対的な原理とみなし、これによってあらゆるものを裁く正義の徒を、人は独断的な狂信家として扱うようになる。「正義」なる言葉の現代における威信失墜と不評はこういう事態に根差している。

しかし、絶対的な万能公式としての正義原則なるものへの懐疑は、正義概念自体を無意味として放棄することとは別である。また、それは正義に関するあらゆる判断を恣意的とみなす態度とも必ずしも結びつかない。各々の正義公式は、絶対的妥当性を承認されないとしても、少なくとも正義に関する実践的推論において考慮さるべき一つの相対的理由、あるいは一応の理由(*prima facie* reason)を人々に指定することはできる。それぞれの正義原則の他の原則に対する比重は固定的である必要はなく、問題の性格や文脈に応じて変化し得る。あるケースにはある原則が優越的な規制力を持ち、他のケースでは別の原則が優越するということもあろう。この場合、優越された原則も必ずしも「無」であつたわけではなく、全く考慮されなかったときに比べて結論の内容または説得力に何ほどの相違をもたらすことができる。確かに「相対的」な比重をもつ正義原則は、それ自体では、すべての問題に、万人が一義的に正しい答えとして承認できるものを与えることはできない。しかし、それは他のベクトルと合成される一つのベクトルに似た仕方で、実践的推論の方向付けに参与できるのである。様々な正義原則の各ケースにおける比重を決定する確実な「計算手続(algorithm)」は知られていない。従つて、同じ原則群を考慮した場合でも、人々の正義に関する実践的推論の結論が完全に一致することはない。しかし、それを理由にこのような判断を恣意的だとすることは、将棋を指す人が常勝を確実にもたらす戦略を知らないことを理由に、彼の指す手をすべて恣意的だとするのに似ている。少なくとも、正義判断の主体や将棋を指す人はこの非難を容認しないであろうし、それは決して理由のないことではない。

競合する様々な正義原則の比重の評価は、何らかのアルゴリズムに従つた演算によるというよりは、むしろ「正義感覚(sense of justice)」とも呼ぶべきものによる。この感覚は、それをもつ者に、正義に関わるすべての問題について一義的な指針を与えるには曖昧^{あいまい}すぎるが、多くの問題についてはつきりした態度決定をさせる程度には明確である。通常、人は自己の正義感覚を意識しないが、彼が「熱く」なるとき、即ち、自分が不正を受けたと感じたときや他人が受けた不正に義憤を感じたとき、顔面の

紅潮と共に意識に昇り来る一つの「抗議」として、この感覚の顛^{さか}われを認めるのである。

正義を疑いつつ不正を非難する人々の態度についての以上のような解釈が可能であるとするならば、かかる態度の矛盾は表見的なものにすぎない。人々が正義を疑う態度を取るとき、彼らの懷疑の対象は、実は個々の正義観であつて、正義の理念ではない。人々は絶対的な万能公式としての正義原則なるものには絶望していても、正義の理念に絶望しているわけではない。彼らは個々の正義観を冷たく突き放すことができる。しかし、既にもつてしまつてゐる正義感覚を、ある日突然意志的決定により放棄するというのは不可能である。正義感覚は失われ得るが棄てられ得ない。人々は、言わば「負わされた」この正義感覚により、好むと好まざるとに関わらず、正義の理念に帰依している。そして、「不正」を指弾するとき、彼らは正義の理念への信仰を告白するのである。

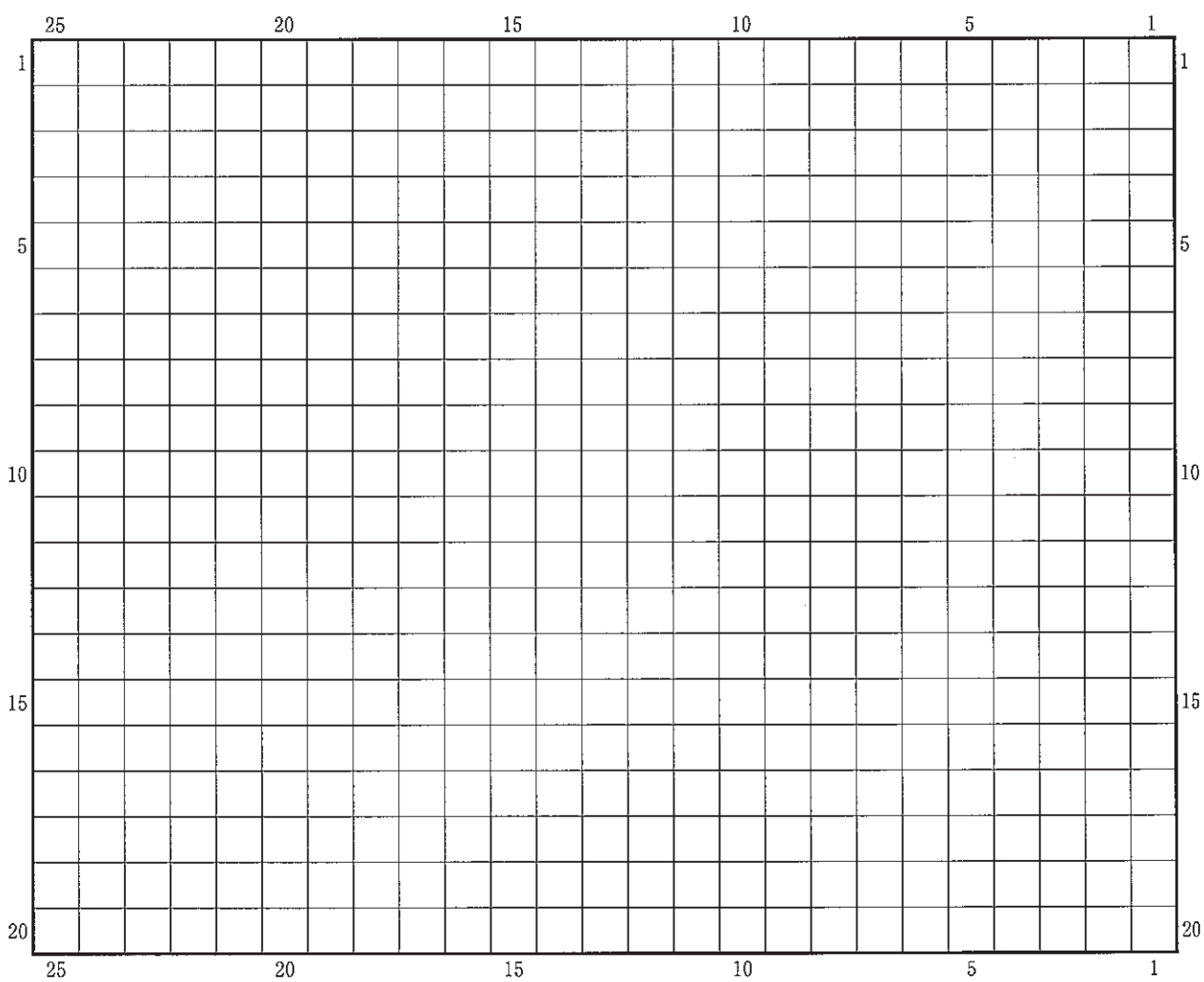
(井上達夫『共生の作法』より。表記等に若干変更を加えた。)

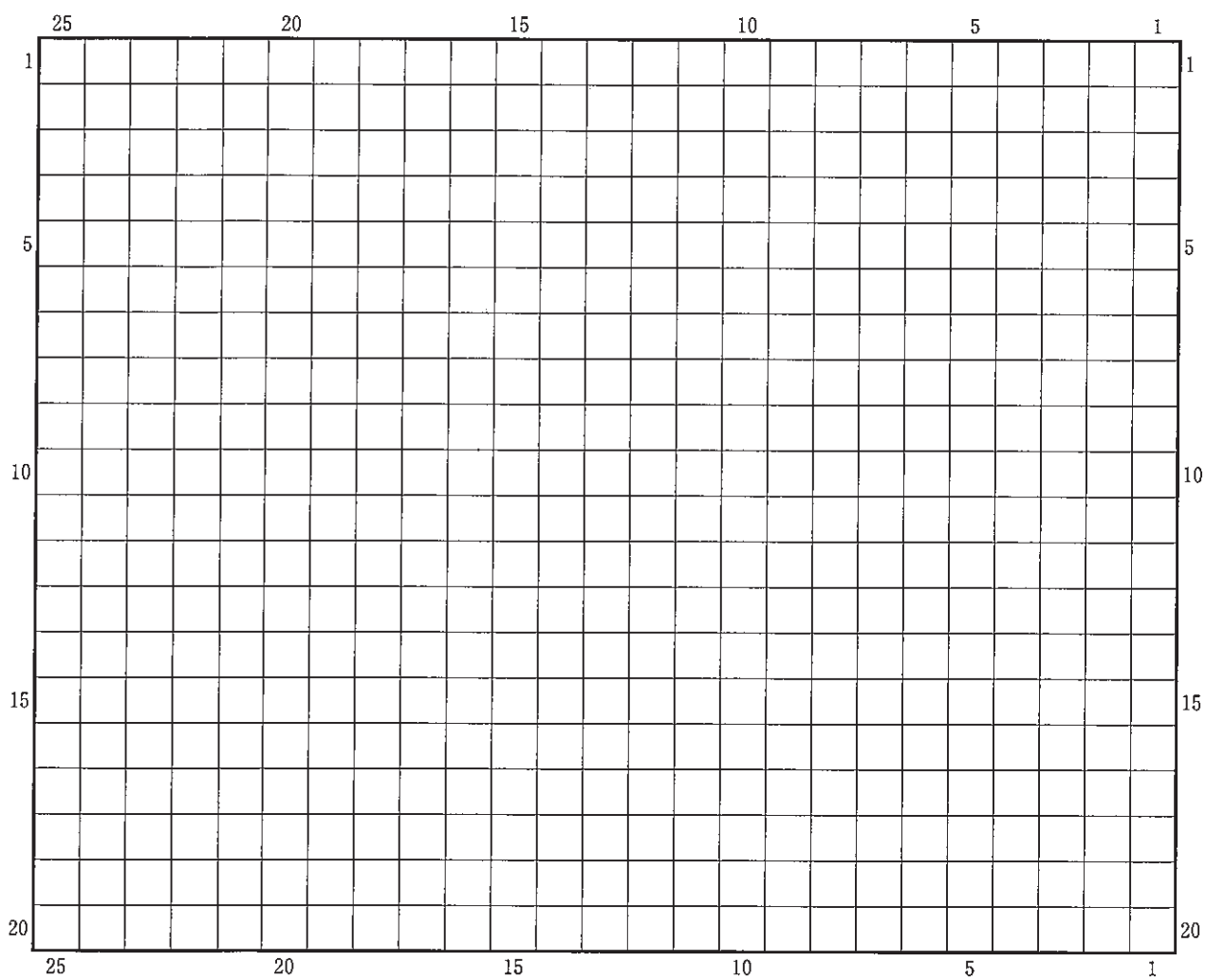
問一 「正義」と「不正」とに対する人々の態度の非対称性が何に由来するのかについて、著者の見解を説明しなさい(五〇〇字以内)。

問二 「正義」を盾にした紛争や衝突の具体例を挙げたうえで、著者の見解を参考にしつつ、意見の対立を克服するにはどのようなすればよいか、あなた自身の考えを述べなさい(五〇〇字以内)。

草
稿
用
紙

(切り離さないで用いよ。)





第二問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

生き物はいずれ死ぬ。どんなに周囲から愛され、その存在意義を認められ、その生が産み出す諸効果に周囲が敬意を払って、その恩恵に浴することがあったとしても、そのような恵まれた状態は永遠ではない。有限である。しかも、その有限性は、生命の有限性とイコールではない。その有限性のすきまに「害虫としての生」という生の様態が巣食うことになる。カフカの『変身』が描き出した生存のおぞましい姿とは、この有限性のすきまを埋める現実のことである。生き物、いやしくも人間をみだりに殺してはならないはずだが、ひとが殺害^{キラブル}可能な存在として、しかも猶予つきで暫定的に生かされてしまう時間というものがある、私たちの終末期には控えている。死刑宣告を下されていながら死刑執行の時だけが先延ばしにされる、そういった時間を「害虫の時間」として表出すること。二〇世紀文学のなかで『変身』がなしとげた何よりも大きな達成はそこにあった。

生き物の命は、想像以上にたくましい。ころつとか、ぼつくりとかは逝かない代わりに、しぶとく生き延びる生がある。しかし、そのたくましさは、脆^{もろ}さやこわれやすさへと、いつのまにか置き換わってしまう。生れてこのかたグレーゴルの名で呼ばれてきた生き物は、臓器の機能不全というよりは、外傷に由来する衰弱と、昂進^{こうしん}する食欲不振と、生きることの希望のなさによって、後戻りのきかない形で死へと追いこまれていく。そして、その脆さ、傷つきやすさに追い討ちをかけるように、父親の家庭内暴力がグレーゴルの死期を早める方向で作用する。『変身』に先がけて書かれた短篇『判決』においては、父の暴言が主人公を「溺死」の刑に処したのだったが、『変身』では、殺害^{キラブル}可能な存在として「変身」をとげた主人公に対する父の暴力が、こんどこそ致命傷を負わせるのである。

『害虫』に変身したグレーゴルの傷つきやすさは、目をおおいたくなるほどである。グレーゴルはまず起きぬけにみずからの変形した身体に皮膚病の兆候を見るが、その皮膚病が全身に広がる速度にも増して、父親の暴力が彼に負わせた傷は、ただでさえ身動きの不自由だった彼をいよいよ障害だらけの体へと変えていく。息子グレーゴルの体の不調を慮^{おもひが}って「医師」の権威に訴えることを咄嗟^{とっさ}に思いついた母に対してさえ、父はそれをはなからはねつけてしまう。父は息子の無防備さ、傷つきやすさを利用

して、すきあらば息子を厄介払いにしようと考えている。戸口から自室に戻ろうとしてもたまたする息子を後ろから蹴飛ばして、左半身に深手を負わせるのも父親だし、家族の女たちを守るのが自分の務めだとも言わんばかりに、リングでグレーゴルを攻撃するのもその父親だ。有害無益な存在を排除することに家父長らしきの発現を見出した父の暴力行使は、いつも一線を踏みこえてしまう。計画的に駆除を施すわけではないが、ことあるごとに衝動的な家庭内暴力で事態を確実に悪化させる。おかげでグレーゴルの傷つきやすいからだはあられもなく壊れてゆく。死に行くものに容赦なく追い討ちをかける虐待。『変身』の物語を悲惨に見せ、しかしリアルに見せているのは、死に行く存在に対して高にかかって攻めかかるヒステリックなまでの攻撃性の昂進を描き出すその非情さである。そして、グレーゴルの傷つきやすい身体は、おそいかかってくる暴力の痕跡をとどめるためのサンドバッグとして見る影もなく横たわる。

もともと、衛生主義的な権力の発現ともいうべき父親の首尾一貫した行動に対して、他の家族がみんな足並みをそろえているわけではない。息子の異状に気づいたとき、ひとまず「医師」の権威にすがるうとした母は、その要求を黙殺され、退けられてからは、ひたすら現実をはぐらかし、息子の姿を正面からは見ないことで、すべてをうやむやにする姿勢をとる。母にとって息子グレーゴルは、一家の大黒柱であった頼りがいのあるグレーゴル以上でも以下でもない。彼女は息子に手の施しようがないとわかった段階で、もはやそれを死んだものとして、はやばやと哀悼の対象に据えてしまったのだ。相手を着実に死へと追いやっていく勢力のかたわらで、すでにその死を先取りする形で哀悼するもうひとつの勢力がある。兵士を戦場に送り出す犠牲者創出のシステムがそうであるように、哀悼のシステムを兼ね備えない犠牲者創出はない。グレーゴルの両親は、皮肉にも調和的な一対をなしている。

さらに、それでも相手が生きているかぎり、その生命を維持するための最低限の雑事にはだれかが従事しなくてはならない。妹のグレーテが果たす役割は、介護者のそれだ。一家は家事労働の一部を家政婦に依存しており、グレーゴルが絶命して、「ひからび」た死骸となつて横たわつた後始末は、そんな家政婦のひとりが引き受けるのだが、彼が生きているあいだ、責任感を持つてその身のまわりの世話を一手に引き受けていたのは妹のグレーテだ。「害虫」の生を息子グレーゴルの生とは見なさない両親

親と異なり、少なくとも、妹グレーテは途中まで「害虫」をれっきとした兄と見なしつつける。介護（もしくは飼育）を要するベツトが如き存在として兄を生かすための努力、それを彼女は日課として引き受けるのだ。

力づくでも「害虫」を独房に監禁しようとする父。もはや息子はそこにはいないと考え、失われた息子の面影にしがみつく母。そして、少しでも「害虫」の延命に役立とうとする妹。「害虫」に変貌したグレーゴルにとって、家族とはそういうものだった。前日までは、老いた両親になんとかゆとりある晩年を保証し、嫁に出すまでのあいだ、妹を扶養することでも家族に大きく奉仕してきたはずのグレーゴルが、一夜にして、排除と否認と介護の対象となる。この家族にとつて、息子の死は間近にせまってくる。稼ぎ頭として一家のなかに君臨することをやめたグレーゴルはもはや死んだも同然なのだ。グレーゴルの収入をあてにしないということは、グレーゴルがもはやそこにはいないかのようにふるまうことであり、妹の引き受けた介護労働は、グレーゴルがいらないかのように生きる道を早々と歩み始めた一家にとつて、最後の過剰労働なのである。それは、目を背けつつも、その気配に手を合わせようとする祈りのようなものである。

余計者の生。それはひと思いに断つことが最終的に容認されてしまう生であり、その生が引き延ばされたらされたで、その生が永遠ではないことがせめてもの救いとなり、かりにそれが短縮されることがあっても、だれもそれを後悔したり、自責の念にかられたりはいしない。グレーゴルが「害虫」に変身してから後、一家の日常はグレーゴル抜きにしても生きられるような生活様式をいつときも早く獲得するために立て直され、要するに、あなたが消えてしまえばどんなにせいせいすることだろうかと、家族が全員で本人に向かって断続的に訴えつつける日常である。妹のグレーテも自分の介護労働が、しょせん一時の気休め（＝祈り）であることに内心は気づいているのであり、介護労働にたずさわるかぎり、その無意味さを考えないようにしているだけだ。そして、その妹による介護の質も日に日に低下していく。

（西成彦『ターミナルライフ 終末期の風景』より。表記等に若干変更を加えた。）

問一 「害虫としての生」とはどのような生か、グレーゴルに対する家族全員の反応を踏まえたうえで、著者の考えをまとめなさい(五〇〇字以内)。

問二 近現代史における「害虫としての生」の事例を具体的に挙げたうえで、そのような生命に対してわれわれはどのように振る舞うことができるか、あなた自身の考えを述べなさい(五〇〇字以内)。

